

日米教科書の比較

歴史の真実に迫る!!

45期生

46期生

I 研究テーマの設定理由

情報化時代といわれて久しい。つまり情報は国境と関係なく国の人々に伝わっていく。私たちが世界からいろいろな情報を受け取ることができる。

自民党支配の体制から複雑な多党連立政権に変わった今、自ら侵略国家であったことを認め、正しい歴史観を国民に情報として示すことは、日本に課せられた大事な責任と思う。歴史教育がいかに大事かを政府や国民は知り始めた。正しい歴史教育を持つことは日本人が今後の国際社会で生存し得る最低条件であると思う。

私は、多種多様の人々に接する機会を持ち、いろいろ違った角度で人を見ることを試みてきた。今度も異なった角度で日米教科書を用いて比較しようと思う。特に歴史の教科書が大事で、これはいろいろな見方をして初めて真実を知ることができる。

II 研究方法

まず日米の教科書の外観について比較し、本の大きさ、重さ、色の配合、著者、目次などによって日米の違いを説明し、それによって何がわかるか。

日米の活動様式、考え方の違い、精神構造などについて何がわかるか。

その次に、米国の教科書のなかから日本について書いてある部分を用いて、日本の教科書と比べてその違いを説明し、外国では日本に対してどのような見方をしているか。これは写真、漫画、さし絵などを用いて真実に迫ろうと思う。

III 研究内容

(1) 外観によってわかること

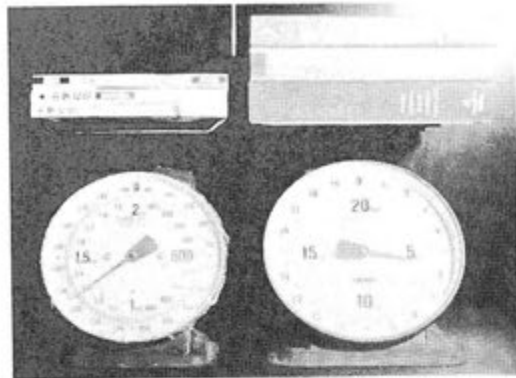
最初に、大きさ、頁数、重さについて計測した。

▼表1 日米教科書の大きさ、頁数、重さの比較

教科書名	大きさ (cm)			頁数	重さ (g)	
	縦	横	厚さ			
日 本	日本の歴史と世界：清水書院	21.0	14.7	1.5	287	450
	中学社会：日本書籍	21.0	14.7	1.5	312	450
	中学社会：大阪書籍	21.0	14.7	1.5	308	450
米 国	世界史論集	25.2	19.0	1.6	304	570
	世界史探検	26.0	21.0	3.3	752	1650
	世界史劇	26.0	21.0	3.5	824	1760
	世界史	26.0	21.0	4.2	984	2150



▲図1 大きさ、厚さの比較



▲図2 重さの比較

表1、図1・2のように、日本の教科書では、大きさ、頁数、重さとも殆ど統一されている。しかし、アメリカの教科書では、大きさのうち縦横はほぼ同一であるが、厚さ、頁数、重さは全く異なることに驚く。アメリカの教科書の重さが日本の約4倍というのは、教科書は家に持って帰るものではなく、学校に置いておくという方針である。だから本の所有権はあくまで学校にあり、学生は読むときに教師に依頼する。

また、宿題という概念がない。

▼表2 日米教科書の表紙の配色の比較

教科書名	背景	文字	絵	
			日	米
日本	白	黒と緑	洛中洛外図巻	メキシコの陶芸像
			アテネのパルテノン神殿	ベナン・マスク
			五弦の琵琶	アウグステ・ガウデンの勝利像
世界史探検	薄茶	白	フランス人権宣言	観音像
			朝鮮通信使行列図	ベリ公爵の時の本の絵
			上杉家本洛中洛外図屏風	ツタンカーメン
世界史	濃黄	濃紫		
世界史	赤紫	黄金		



▲図3 表紙の配色の比較

次に、日米教科書の表紙の配色を観察すると、表2、図3のように、日本の場合は、3社とも教科書の表紙は白をベースにし、文字を黒と緑で表示し、その上に主として洛中洛外図と正倉院の宝物で飾るのが基本である。非常に古典的な日本美を表しており、日本人にはなじみ易いデザインと思う。白をベースにするのは日本の社会の特徴で、本の表紙の他にも、日本の車は6、7割が白色であるし、冠婚葬祭ではほとんど白が基本色になっている。

アメリカの場合、非常に鮮やかで豪華な感じがする。日本の控え目に比べて、些か大げさと思う。表紙の絵を見ると、ばらばらで全く統一性がなく、どういう目的で絵を飾っ

たか理解に苦しむが、その反面、多種多様でとても興味深い。

ここで、日本の教科書の大きさと重さと配色の同一性をアメリカの非同一性と比較した結果、日米の活動様式の違いについては次のように思う。

日本は管理型かつ集団指向の教育をしているのに対して、アメリカは自由かつ個人指向の教育をしている。日本の方は、これによって、集団から外れた学生に対していじめとか嫉妬等の行為を起こして沢山の中途退学者が出て社会問題にもなっている。アメリカの方は校内の殺人や麻薬の使用が問題になっている。

日本の集団指向とアメリカの個人指向についても一つの面白い例は、アメリカの方は著者の名前がたいてい一人で、表紙に大きく書いてあるが、日本の方は殆ど十数人で、教科書の最後の方に目立たないように小さくならんでいる。

日本では、集団指向により、はっきりした責任感をもたないわりに穏便に歴史を書くことができ、アメリカでは、個人指向により、責任を持って主観的に歴史を書けるが真実を曲げて書く恐れがある。ただし、日本の集団が同じ間違った方向に走ると真実を隠すことになり、思いこみが強くなり、他国への侵略につながる。そのかわり、アメリカの方は多様な歴史の教科書を選択する自由があるので、集団の暴走は少ない。こういう集団指向の弊害は日本の経済成長の末期に非常に起こり易い。たとえば、会社の系列化、市場の不透明、なれ合いと持たれあいの精神構造など非常に世界から誤解を招きやすい。

(2) 相手国の記述量によってわかること

▼表3 日本の教科書のアジアの頁数

教科書名	全体		欧米		東アジア		日本	
	頁	%	頁	%	頁	%	頁	%
清水書院	287	38	13	5	1	244	86	
日本書籍	312	41	13	6	1	265	86	
大阪書籍	308	42	13	12	3	254	84	

▼表4 米国の教科書のアジアの頁数

教科書名	全体		アジア	
	頁	%	頁	%
世界史探検	752	118	15	
世界史劇	827	92	11	
世界史	984	94	9	

日本の教科書の中を見ると、表3の如く、欧米の部分は三冊とも全体の13%を占めているが、東アジアの部分は、1~3%にすぎない。残りの部分は全部日本史で約85%を占めているので中学校の歴史は殆ど日本史といっても過言ではない。

一方、アメリカの教科書の中でアジアが占める部分を見ると、表4の如く、各々15%、11%、9%を占めている。

日米を比べると、歴史を習得する期間は異なっているが（日本は3年、米は5年）、欧米ではアジアの部分が10%以上あるのに対して、日本では2~3%と非常に少ない。以前から日本はよく脱欧入亜と叫びながら、教科書の内容から見ると甚だアジアの部分が不足している。日本はアジアに属しているのに日本の隣人を理解しようという姿勢が感じられない。

でも、最近の新聞やニュースなどを見聞きすると、日本は世界の孤児になりつつあり、アジアをもっと大事にすべきであるということによりやく気づき始めてきたようだ。

IV 欧米人が日本に対して特に興味深く思っている部分

日米教科書の解釈に大きな違いを示している部分についての考察

米教科書中に記述されている内容の中で、欧米人が日本に対して特に興味深く思っている部分や、日米教科書の解釈に大きな違いを示している部分を、五つだけ取り上げて考察してみる。

(1) 天孫降臨について

「天孫降臨」についていえば、西洋歴史に登場するギリシャ神話のように、日本の天皇誕生も神話のように受取り、歴史の教科書に持ち出すのは興味深い。(図4)

天孫降臨については日本の教科書には殆ど記載されていない。アメリカの教科書では日本の起源について神がかりによるもので面白く、ギリシャ神話のように日本の天皇が誕生したと神話化して記載するところなどはいかにも西洋らしい。更に、東の国日本より太陽が出るので、日の丸の国旗まで記述したところは、もはや歴史の分野からはみ出て、何か日本を非現実的な特殊な存在にまで位置づけようとしている。

(2) 紫式部の「源氏物語」について

殆どの教科書で紫式部の源氏物語を大きく取り上げている。(図5) この作品は、日本の王朝の美を表し、日本独自の国風文化を作り上げた世界で一番偉大な作品であると欧米では評価している。その内容よりも宮廷の中の出来事と純日本語(かな)で書かれていることをよく強調してあった。世界で一番良い作品であると誉めていたが、なぜそのように高く評価しているのか? 最も大事なものは純日本語(かな)で書かれたことが世界にとって非常に大切なことだからである。各々の国には固有の伝統と文化があり、私達は尊重するべきであると同時に尊重されるべきである。「世界史」の中にいわゆる「国風文化」を作り上げた例があった。14世紀イギリスのショーサーのcantaberly物語が有名である。それまでイギリスではすべて、英語ではなくフランス語を話したり書いたりしていたが、この作品により初めて英国文学が確立した。私達にとって身近な英語でも、それ以前はフランス語であったことは、いかに文化というものはその積み重ねによるものであるかということ認識させられる。ショーサーの作品は14世紀のイタリア・ルネサンスの影響を受けて、イタリアの人文主義者ボッカチオのデカメロン(十日物語)をまねて創られたものである。つまりそれ以前にイタリアでも国風文化が流行し、特にダンテの神曲を初めイタリア語(トスカナ語)で書かれた作品が多く、国民文学の先駆者とされている。しかし、その点でいうと、日本の源氏物語は、



▲図4 世界史より



▲図5 世界史探検より

それより三百年も前、11世紀頃にすでに日本独自の国風文化として開花していた。だから、「源氏物語」こそ偉大な作品であることを改めて認識した。それまでの模倣文化を日本化して固有なものを創り、創造的な破壊を実行した世界的な良い見本である。

日本でも紫式部の「源氏物語」は、たいへん有名であるが、日本の教科書を読む限り、「世界でもっとも偉大な作品だ」と感じられなかった。でも、米国の教科書を読んで、改めて偉大な作品であると認識した。

国風文化は必ずしもうまくいくとは言い難い。例えば、漢字を取り除いた日本語、ラテン語を取り除いた英語は時として意味不明な言葉になる可能性があるように、漢字やラテン語はそれなりに重要な役割を果たしている。つまり、漢字とラテン語なしでは、日本語や英語は成り立たないのである。漢字の表意文字の良さとかなの表音文字の響きによって、初めて日本語の素晴らしさが出てくる。日本文化は模倣文化とよく言われるが、他の文化の良さを認めながら、それをうまく自分の文化に取り入れた経緯から見れば真に創造的な破壊の成功例と言えるだろう。

ところが、隣の韓国のように、突然国風文化を提唱して、今まで漢字が70%も使われていた韓国語をすべて表音文字のハングル文字のみに変えてしまったことで、韓国の人々が不便を感じたということを知られたが、改めて模倣文化から独自の国風文化に転換する事はとてもむずかしい事だと認識させられた。

(3) 武士の美について

武士の美の代表として侍の絵が飾ってあるのは非常に興味深い。(図6) もし欧米の日本に対する見方を2つに分けるとすれば、一つは、王朝の美は文化の代表として、もう一つは、武士の美を精神の代表として定義しているのかもしれない。以前の日本の政治、社会の構造は幕府時代を除いて、全て中央集権であった。つまり幕府・将軍時代、封建時代などに登場してくる侍は日本ではかえって異常なできごとであったのである。にもかかわらず、その侍の異常な精神構造だけは今だに日本の現在社会に深く根付いている。会社など自分の所属する集団には異常な忠誠心を持ち、これが日本の経済成長の根源とさえ言われた。しかし、欧米から見れば、その侍の異常な精神構造は、はなはだ不可解なものである。

(4) 帝国主義について

近世の戦争の原因について、日本の教科書は、明確に書かず、不透明である。

それに対して、アメリカの教科書は、日本が天皇を最高統帥者として帝国主義の道を歩み、植民地を求め、海外へ侵略した事についてや、相手国に多大な損害を与えた事などを、はっきり記述していて、日本に原因があった事を述べている。(図7)

さらに、日本は日本の拡張政策を一方向的に正当化しているようだが、実際は、日本の方が国際条約を一方向的に破ったのだとマンガで風刺している。(図8)

米教科書の一節に、「1904年2月9日、場所はアスル港、日本はいつものように宣戦布



▲図6 世界史探検より

告なしに停泊していたロシア旗艦ペトロ・パウロスクやその他の軍艦を不意討ちした」とはっきり書いてあった。欧米人は、日本が真珠湾以前にもよく不意討ちをしていたと、批判的に見ている事に大変驚いた。又、明治天皇は鷹のように強欲な人で、ロシアをもなすままにするほど横暴だと、イラストで描かれており、これが日本天皇の印象といえるだろう。(図9)

以上のように日露戦争の前段階となる事実は日本教科書には見られない、その結果、なぜいまだに日露関係がうまくいかないのか我々日本人もはっきりしていない。だから正しい歴史の事実を知ることがいかに大事かがわかるだろう。

我々の学習したロシアは、日ソ不可侵条約を一方的に破り、北方領土を占領したという卑怯な国のイメージであり、殆ど日本は被害者の立場でものごとを考えてきたが、これは非常に危ない事だと思う。

さらに、近年来は、日本の侵略行為に対して韓国や中国などのアジア諸国からも厳しい指摘を受けるようになってきた。そのため、やっと日本の教科書は「アジア進出」を「アジア侵略」または「侵出」に書き直すという行動に出はじめた。

これは、日本が自主的に記述したのではなく、諸外国から指摘されたためしかたなく、やっと「侵略」と書き始めた事は、諸外国に不快感を与えると同時に非常に残念なことである。

また、当時、現地の人々に多大な苦痛を与えたが、それについては、あまり報道がなかった。しかし、8月2日の朝日新聞によると、当時ベトナムで、多数の人々を餓死させたのっており、日本も徐々に真実を知る、知らせるといふ姿勢が表れてきている。

先日の細川総理大臣の所信表明でも、はっきり、日本の侵略により、アジア近隣諸国の多くの人々に苦痛を与え、戦争への深い反省とおわびを述べている。また「歴史の教科書も正しい歴史認識で記述されるべきだ」との質問に対し、首相は、「国際理解、国際協調の見地から、歴史教育を進める必要がある」として子どもたちが、正しい理解を持つように希望している。この反省こそ、国際社会に入る第一歩だと思う。

(5) 原子爆弾投下について

最後に、米国教科書で原子爆弾を広島、長崎に投下した理由をはっきり説明しているのに驚いた。結果的には、米国が加害



▲図7 世界史探検より



▲図8 世界史論集より



▲図9 世界年代記より

者の立場として確実に自分の言い分を歴史に記入した。これに対して、日本の教科書は原因にはふれず、ただ被害の状況を述べただけで終わっているのは非常に危険な錯覚を与えることになる。

この原爆投下について原因、経過、結果の3つの方向から分析しなければならないと思う。

まず原因として、日本のアジア侵略である。次に経過として、太平洋戦争の初期では日本侵略軍は大きな勝利をおさめたが、徐々に敗戦の気運が始まると色々な諸島が戦場になり、日米ともに膨大な数の戦死者がでてきた。米国はこれ以上死傷者を増やさないために日本に降伏を呼びかけたが、日本は無視する態度を取り続け、日本国民には決戦を要求し、敗戦すると知りながら、無駄な抵抗を続け、無数の死傷者を出し続けた。そのため、停戦させ、人類の平和を取り戻すためアメリカはやむなく原子爆弾を投下したと記述してある。

日本の教科書は、なぜ原子爆弾を落とされたのかという原因については論ずるところか、日本の戦後処理について、ソ連よりもアメリカの方を有利にさせるため原子爆弾を落とすと書いてある。

さらに、落とされた後の悲惨さや、被害状況などを中心に述べ、その結果、まるで、日本はかわいそうな立場の国で、まったく罪のない被害者のようにすり変わってしまっている。

日本の近代史を見ると、日本は節度ある行動から脱線し、アジアでの悲劇を招いた事は、心に明記しなければならないと思う。特に、歴史の教科書では文字の遊びや事実を隠す科目ではなく、あくまでも真実を述べ、率直に伝えなければならない。そして日本は、歴史的な過ちを認め、ただす事によって、真の友人をアジアでつくる事ができると思う。日本にとって、最も大切な友人は、まずアジアの諸民族からだと強く思う。

V 総括

私達が勉強している科学は大きく2つに分けることができる。1つは自然科学、もう1つは人文科学である。自然科学は非常に客観性を持ち、真実がはっきりしているが、人文科学は異なる主観性をもっているため、真実を歪める可能性が高い。従って、私達が歴史においてその真実を追求しようと思うなら、教科書以外の歴史書を探して読むか、あるいは、外国の教科書を読むほか方法がないと思う。

外国の教科書を見た後私が感じたことは、いくつかの点で日本の教科書と異なっているということだ。まず、外見、大きさ、デザイン、レイアウト、所有権などは全く異なり、次に、内容や見方や重点についても多くの相異点が見られた。中でも、米国の教科書の不統一性と日本の教科書の統一性についてはその違いの大きさにびっくりした。

私達は、世界の中の一員であるが、資源のないわが国は、どうしても良き隣人を持たなければならないのが実状である。そして通商国家をめざすことが唯一生存できる道と思う。但し、良き隣人との友情はお互いの立場、つまり歴史、文化、社会などを深く理解しなければならない。この点について、私達の教科書は甚だ不十分であり、国の方も欧米のこぼれ目に向けた結果、アジアとの今日の相互不信、軽視につながったと思う。「脱欧入亜」という標語があるのはまさに、本来はアジアの一員なのに、アジアの一員として認められなかったからこそこの言葉が出たと思う。さらに、一番残念なことは教科書が歴史

の真実を濁して書いたことである。外国政府の批判や外圧によって初めてしぶしぶ書き直そうとする日本の姿勢が世界の人々に不快感を与えることになる。まして、日本が加害者で、相手が被害者である以上、ますます深い歴史観を持つべきである。

私達は歴史に対して清算しつづけないとよく言われ、いつになっても日本は世界の孤児になっていることも事実である。それでは私達は21世紀に生存し得ない。従って、私達のもっとしっかりした歴史観を持つことが大事である。だから、それ以前に、私達は歴史の教科書の真実性を求めるべきである。これは私達が世界の舞台に入る第一歩である。私達は21世紀の主人公である以上、歴史の真実を知り、それに基づいてアジアないし欧米の隣人と付き合う責任を持たなければならない。

さて、多様な歴史書を読ませてもらうことによって初めて多元性の価値観を持つことが可能になる。国から情報管理されたような一方的な歴史観は非常に危険である。管理教育といわれて久しいが、国が成長している段階ではとても役割が大きかった。しかし、社会が成熟化し、且つ高齢化し、しかも無国境の時代に一方通行的な教育は自ら限界を生じる。私達の自己責任で対処しなければならない時代がやって来るのは時間の問題である。

今回、米国の歴史教科書を勉強する機会にめぐりあうことができたが、日米の教科書の相違点を知ることによって21世紀の足音が聞こえてくるさなかに、私自身が将来取るべき姿が微かに見えてくるような気がしてしょうがないのである。

VI 参考文献

Readings in world history (世界史論集) 1990年, 304頁

著者: Holt, Rinehart and Winston

出版者: Harcourt Brace Jovanovich

Exploring world history (世界史探検) 1990年, 752頁

著者: Hold O'Connor

出版者: Globe book company

The PAGEANT of WORLD HISTORY (世界史劇) 1991年, 824頁

出版社: Prentice Hall

著者: Gerald Leinwand

History of the world (世界史) 1992年, 984頁

著者: Marvin Perry, Allan H. Scholl, Daniel F. Davis

Jeannette G. Harris, Theodore H. Von Laue

出版者: Houghton Mifflin Company

Chronicle of the World (世界年代記) 1990年, 1296頁

出版者: ECAM publications

20世紀全記録 1987年, 1327頁

出版者: 講談社